因果帰納における事象間の随伴性が 0 である時の 自我関与の効果の検討

新居佳子

(大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード: 因果帰納、自我関与、随伴性

The effect of ego-involvement on causal induction in cases contingency of two events is 0

Yoshiko ARAI

(Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Key words: causal induction, ego-involvement, contingency

目 的

因果帰納研究において、人は事象間の因果性を考える際、事象と事象の随伴性が大きいほど因果関係を見出しやすくとされる (Cheng, 1997; Rescorla & Wagner, 1972)。

新居・赤井 (2008) は、因果帰納に影響を及ぼす要因として、随伴性に加え、自我関与性を検討した。自我関与とは、ある事態において個人が深く巻き込まれている状態を指す。また、この状態にある時、客観的な反応が行われず、認知や作業に影響を及ぼすとされる。検証の結果、因果帰納において、自我関与は影響を及ぼし、自我関与がある時はない時よりも「因果関係がある」と判断されやすいことが確認された。さらに、新居 (2009) は、この自我関与の効果が、因果性に関して何も情報が与えられなければ、随伴性が大きい場合では見られず、0 であるような場合に現れることを示した。

本研究では、新居 (2009) で得られた結果についてより詳細に検討するために、随伴性を 0 のみにして実験を行ない、因果帰納における自我関与の効果を検討する。自我関与の効果は、新居・赤井 (2008) と同様に現れることが予測される。

方 法

計画 2 (自我関与: なし・あり) の 1 要因計画で、被験者間計画であった。

参加者 女子大学生 53 名であった。自我関与性なし条件に 29 名、あり条件に 24 名が割り当てられた。

課題 自我関与性なし条件は、ある薬が液体の変色反応の原因であるかどうかを調べる、自我関与性あり条件は、ある薬が「あなた自身」のアレルギー反応の原因であるかどうかを調べるという状況が、それぞれ設定された。実験は集団で行なわれ、スクリーンを使って、ある薬を液体に入れると、または「あなた自身」が飲むと、変色反応またはアレルギー反応があったというケース、同様の行為を行なったが反応はなかったというケース、そうしなかったが反応はあったというケース、そうはせず反応もなかったというケースがランダムに計 20 個呈示された。随伴性は、どちらの条件も 10/20 であった。その後、その薬が反応の原因であるとどれくらい思うかを 7 段階評定させた。

結 果

各条件における評定平均値を Figure 1 に示す。

これらのデータについて 1 要因分散分析を行なった結果、自我関与の主効果は非有意であった ($F(1, 51) = .66, n.s.$)。

考 察

因果帰納における自我関与の影響は、2 つの事象の随伴性を 0 だけにすると見られなかった。これは、予測と異なっ

ている。

このことから、因果帰納において自我関与は、随伴性が多様である時のみ、影響を及ぼすのではないかと考えられる。もしそうであれば、人は事象間の因果性を考える際、事象と事象の随伴性についてまず判断を行ない、それによって、自分との関わりを考慮するかどうかを考えているのではないだろうか。この点については、本研究の結果のみでは不十分であり、随伴性判断と自我関与の関係についても検討が必要であるだろう。

なお、自我関与の効果が得られている状況として、他にも、因果性について「ある」という情報が付け加えられ、かつ随伴性が大きい場合 (新居, 2009) がある。これについても本研究で行なったように、より詳細な検討を試みる必要があるだろう。

引用文献

Figure 1. Mean causal strength ratings for each of the two conditions.

新居佳子 (2009). 因果推論に自我関与性が影響を与える状況 日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 921.

新居佳子・赤井誠生 (2008). 因果推論における自我関与性の効果の再検討 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 956.

Cheng, P. W. 1997 From covariation to causation: A causal power theory. *Psychological Review*, **104**, 367-405.

Rescorla, R. A., & Wagner, A. R. 1972 A theory of Pavlovian conditioning: Variations in the effectiveness of reinforcement and nonreinforcement. In A. H. Black & W. F. Prokasy (Eds.), *Classical conditioning II: Current theory and research* (pp. 64-99). New York: Appleton-Century-Crofts.